震度七の体験（1995 年 3 月号掲載・坊池　政美）

穏やかに迎えた平成 7 年の初春の明け方、いつもの私なら朝 5 時頃に起きて軽く乾布摩擦をし、運動着に着替えて近くの公園のあたりを散歩しているところだが、1 月 17 日の朝は少し目覚めが悪く、うとうとしていたら突然大音響とともに身体が宙に放り投げられたと思うと、ギャッーと叫んで夢中で懐中電灯を手にし、玄関口へ飛び出した。咄嗟に大地震だとわかり、消防作業服に着替え、一目散に消防署の方へ走り出した。

ところが、家々の倒壊によって道はさえぎられ、あちこち迂回しながら、やっと須磨消防署にたどり着いたら、署前の道路は大きく裂け事務所は瓦礫の山、署員達はすでに通信員一人を残して出動していたので、何とか数名の署員を非常呼び出しし、後を通信員に委ねて、私は遠くで紅蓮の炎をあげて燃え盛る火災現場へと駆け出していったのである。

一度に数か所の火災が発生したためわずか 1 台の消防車で 2 線放水による防御では、とてもかなわない。倒壊家屋の下敷きになった肉親を助けてほしいと泣き叫ぶ人々、水道断水のために学校のプールの水だけが頼りのなさけない防御活動、近隣住民の応援を受けながら、延々10 数時間に及ぶ消防活動によって、どうにか、鎮圧状態になり捜索と人名救助に主力を注ぎ、一人又ひとり救助されていった。

そして、19 日には、広島市消防局をはじめ全国各方面から消防隊、救助隊、救急隊等大部隊の応援をもって緊急対応を処理していった。一日に数 10 回の救急出動と数回に及ぶ火災出動には消防職員達もさすがに閉口した。

朦朧とする意識を振り絞って、時を移さず指揮し、職員を励まし、食事をすることすら、忘れるほどの状態が続いた。続けざまに襲う余震の中での人命救助などは、とてもこの世のこととは思えないほどの光景である。

それでも、少し落ちつきを取り戻し始めた頃から、一体今までの震災対策は何であったのだろうか。コツコツと進めてきた自主防災活動は何であったんだ、そのような無力感がこみ上げてくると同時に、これからも臆することなく勇気をもって万全の対策のために力強く発言し、行動したいと思った。